

汲古一心

『仏蹟めぐり膝栗毛』(十)

中村素堂

大塔の背面には有名な菩提樹を天蓋のように繁らせた下に、四大仏蹟中の第一、釈尊成道の金剛宝座がある。円形文の美しいレリーフを施した頑丈な欄楯、すなわち石の玉垣に囲まれた中は広く一段高い石の床その上に畳三枚敷くらしい黒ずんだ一枚岩の宝座がある。欄楯のすき間から見ると、この宝座の四周にも唐草文などのレリーフが見え、これに密接して大塔第一層の石壁の千仏龕風の彫刻も見える。

手はおのずから絡子を正し、合掌礼拝、熱いものが全身にこみ溢れてくるようだ。大聖世尊が人間の大光明となられた地点である。命のうちこんな有り難い勝縁を得たことを嘔みしめるようにして佇んでいた。そして鬱蒼たる蔭を作っている大菩提樹を振り仰ぐビツバラという木も随分偉大な木である。かつてこの正覚の宝座のほとりにあった縁によつて菩提樹の名を得、ここに巡礼する万億の仏徒に仰がれてゐる——と思つてゐる眼先を、ツーッと一枚か二枚たしかに菩提樹の葉が散つてきた。厚さのあるハート型の潤葉がかすかな音をたてて石だたみの路におちた。

はっと足がそちらへ走り、その一枚を拾うことができた——とたんに、夜明け前の暗がりから湧いたかのように警備の役人が側へよつてきて手つき手まねの言葉で拾つてはいけないという。

国立寺院ともなると、やかましいもんだなアと思つたが、素直に捨てると、その警備の役人がするすると欄楯をはしごにして菩提樹の上へよじ登りはじめた。枝の出ている辺でちよつと探し葉型のよい大ぶりの葉をもぎつてきて、私どものポケットに入れてくれた。言語不通で本當の意味は判らなかつたが、合掌して感謝の意志表示をするとニコツと笑つて行つてしまつた。

本當はいくらかほしかつたのかと、今でもふと思うことがある。しかしその瞬間の態度の中には、ひどく温いものを感じたことの方を大切に記憶に留めておこう。

夜が明けてきた。少し離れて塔を見るべく万灯供養の五段の石欄の側を通ると、大地の土にこぼれた浸み灯油が、靴下を通して一足ごとにべつとりべつとり着いてくるのに閉口した。が、靴ははけないので、階を登り靴下をすてて靴をはき、塔の四周の丘のようなところを一周することにした。

ちよどちベットベツトの寺から衣冠をつけた僧侶の一行が、旗をかざし樂を奏しながらバイタラ経のような経を肩に荷つて、朝の勤行に大塔へ行くのに出あうことも出来た。他の東洋仏教国寺院もあるが、それもこのような勤行をするのかどうか、どこかの寺内で鑿の音がかすかに聞えていたのもあつた。

日の出ぎわの茜あかねの空に仰ぐ大塔の莊嚴、うすれてゆく星の光り、伝説のとおり成覚の時を信じるのになんの躊躇もなく、またベンガルの王様に憎まれて伐られても土に埋められても嵐に折られても、なお植えつがれて黒々と繁る菩提樹にも深い感既を持ちながら、静かに足は釈尊沐浴の蓮池の方へと向かつていつた。

丘を下つて歩いてゆく芝生の中で、何か軟かいものを踏んでしまつた。とたんに臭気が靴にまつわる。その国の寺を持たない参拝者の野宿の排泄物である。それがまた、あるわあるわ、助けて下さい……。

静寂をたたえているようなブツダガヤの世尊沐浴という池は、寺院の廻廊のような石造の門を通り抜けて池畔に出る。

大塔を去るわずか百二、三十メートルのところ、すでに何人か白布を腰にまいて水浴をしている。波紋がゆるく拡がって周囲の蓮、水蓮の葉をゆるがせている。しかし水はあまり清澄とはゆかないが、広い池面に映る朝の光の中で黙々と浴みするこの仏弟子たちの敬虔な行は、古い宗教の姿にふれるものがある。

しかし野糞にはおそれをなして彼らのテントの側を避け、丘の上の道へ出て振り返る旭日下の大塔の威容、またその傍のアシヨカ王奉建石柱一部の磨きのみごとき。そのむかし、この王は一日中一遍の瞬きもしないでこの大塔だか菩提樹だかを見ほれていたという逸話は、作り話としても全く敬慕の情をいい得ている。

(つづく)

『仏教書道』昭和四十一年